

## はじめに

2000年という年は私にとっても立命館大学の歴史にとっても大きな転換期となった年ではないかと思う。衣笠キャンパスには人文、社系学部が集まっているが、それまで教育や対人援助に関する学問領域は必ずしも十分に展開しているという状況にはいたっていなかったと思われる。

それが、20世紀から21世紀への1千年紀の転換点に衣笠キャンパスにも大きな変化がおこることとなった。

一つは、20世紀最後の年である2000年に教育科学研究所が発展的に改組され人間科学研究所が発足したことである。人間科学研究所は文部科学省から学術フロンティア推進事業の指定を受け5年計画で『対人援助のための人間環境デザインに関する総合的研究』プロジェクトをスタートさせることとなった。これによって心理学、教育学、社会学、社会福祉学など対人援助に関する学問分野が融合して研究活動が飛躍的に発展する研究の基盤が整備された。

もう一つは、21世紀最初の年である2001年に対人援助の科学と実践の統一をめざした大学院応用科学研究科が設置されたことである。同じ年に同研究科の付置施設として立命館大学心理・教育相談センターも開設され、9月からは外来の受付などの業務を開始した。

私は奇しくも世紀の転換点でこれらに関わらせていただくことになった。人間科学研究所では、子どもプロジェクトがスタートし、そのメンバーとして研究プロジェクトに参加することになった。また、新設された大学院応用人間科学研究科への配属を命ぜられ大学院生の研究指導にあたることになった。さらに、心理・教育相談センターに関しては、開設の準備に参加したことおよび初代の所長に任じられ、心理・教育センターの基盤づくりあたった。これら3者の関係やフィールドが複合しかつ融合して今日があるわけだが、これらの背景の中で生まれてきたのが本報告書の舞台となった「あひるくらぶ」の活動である。

「あひるくらぶ」の発足の中心となったのは、心理・教育相談センターに外来通所していた2名の親であった。プレイセラピーを中心とした活動から親と院生がコラボレートしたより教育的色彩のつよい活動を志向した話し合いがな

され、月1回の土曜日を活用して研究と親の会の活動を融合した活動として誕生した。

「あひるくらぶ」は、2003年4月からスタートした。自閉症スペクトラムの子どもたちを対象にした療育・教育活動という性格と学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究」プロジェクトの一つである「子どもプロジェクト」のサブグループ「遊びの発達と支援B：関わりに難しさのある子どもへの援助」に関する研究活動という性格をあわせもっている。

本活動で重点をおいて取り組んできたのは以下の点である。

ソーシャルスキルやコミュニケーションスキル（相手とのやりとりや共同遊びなど）を発展させる試み

固執性や常同行動を柔軟性や想像的遊びへと発展させる試み

リトミックなど運動や動作と協応させた身体の実現を発展させる試み

誘発される衝動性を抑制するための調整化の試み（自己調整や環境調整）

本報告書は、第1部理論編、第2部実践編、第3部座談会という構成になっているが、全体を通して上記の課題がいくらかでも達成できていれば幸いである。ご意見や感想をお寄せいただきたい。

なお、本報告書中対象とした子どもの氏名はイニシャル表記とした。その他の子どもたちの氏名は仮名を原則とした。

これまで、あひるくらぶの活動を見守り、支えてきてくださった関係者のみなさんに心からの感謝をもうしあげたい。特に、本研究は、株式会社自然科学（代表取締役社長、土井寿奈子氏）からひとかたならぬご協力をいただいて活動をすすめてきた。また、研究支援センターの石田昌幸さんには発足前から三年間にわたってあひるくらぶの活動へのサポートを受けてきた。お二人には、ここに記して感謝したい。

2005年3月19日

今年度のあひるくらぶ最後の日に

荒木 穂積